

飲みニュケーションの文化人類学

—— 酒は現代日本社会に何をもたらすのか ——

文化人類学履修モデル シンジルトゼミ

214-L1040 隈元 祐羽

1. 序論

これまでの酒に関する文化人類学的研究は、非日常な場面における酒に注目し、酒を飲まれるもの、「客体」として捉えていた。本論文では、酒をめぐるこれまでの文化人類学的な捉え方を批判的に再検討し、日常的な飲酒における酒とはどのような存在なのかについて、酒を「主体」とした視点で見出すことを目的としている。

2. 研究対象としての酒

2.1 文化人類学における酒研究のはじまり

文化人類学者が飲酒行動・飲酒文化について研究をはじめたのは 20 世紀後半のことである。「アルコール依存症」という社会問題を念頭に「人はなぜ酔いをもとめるか」ということを世界各地の事例から導こうとした。これらの研究は欧米の人類学者によって始まった。

2.2 日本の文化人類学者の語る酒

日本の文化人類学者の酒研究は、①酒造の文化、②酒の用いられる場、③酒の効用の 3 つに分類できる。①については、民族特有の酒の造り方に注目し、酒造法の起源について推察している。②では「宴」に注目した学者が見られる。彼らは形式張っている宴会と無礼講の穏座という宴の二面性に注目し、酒を集団で飲まれるものとして扱う。③では、酒の効果を儀礼的な視点や社会的側面からまとめている。

2.3 酒は特別な場で飲まれるだけのものなのか

先行研究は、「非日常」の場面に注目し、酒を集団をまとめるための道具として語るケースが多かった。本論文では、日常生活において人々がどのように酒を位置づけているかに注目する。結果として酒は日常生活において如何に活躍し、人々の行動に影響を与えているかを解き明かす。ところで、酒が「役に立つ」とはどのようなことを指すのだろうか。次章では、このことを議論していく。

3. コンヴィヴィアリティと現代日本社会

3.1 現代日本社会

酒の消費には経済状況が関係すると考え、景気が似通った 1990 年代以降を本論文では現代日本社会と定義する。現代日本社会の特徴を「経済」「情報化」「グローバル化」の視点からまとめ、このような社会に必要なものの一つとして「コンヴィヴィアリティ」があるのではないかと述べている。

3.2 コンヴィヴィアリティ

コンヴィヴィアリティという概念を提唱したのはイヴァン・イリイチである。イリイチの議論を元に、筆者はコンヴィヴィアリティを、「人と人、人と環境が交わるなかで、各人が独立した存在として自分の意志に基づいて行動できる状態」「互いの違いを受け入れ合い、その違いを活かして共に生きていこうとする状態」と解釈した。

3.3 現代日本社会とコンヴィヴィアリティ、そして酒

現代日本社会がコンヴィヴィアルな社会となるには、人々がコンヴィヴィアルな関係性を築いていく必要がある。筆者は「腹を割って話すこと」がコンヴィヴィアルな関係性を築くための第一歩だと考える。自己の内面を表現することが苦手と言われる日本人であるが、酒が役買うことで、自身の内面を他者に伝えやすくなっている。この効用を、日本社会を生きる人々は実感しているのだろうか。この点を次章で見ていく。

4. 現代日本社会と酒

4.1 飲みニュケーションに対する人々の考え

従来 of 日本社会で働くサラリーマンにとって飲みニュケーションは重要なものであった。オフィスが「建前の空間」とすれば居酒屋を「本音の空間」として、「ここだけの話」的なことも会話されることがあり、関係性を深める役割を持っていた。しかし、近年では「飲みニュケーションは不要なもの」と認識されており、飲みニュケーションを取り巻く環境は変化している。

4.2 現代日本人と酒

アンケート調査結果より考察した。酒は現代日本人にとって「コミュニケーションに関わるもの」と捉えられており、プライベートな場での飲みニュケーションは肯定的に捉えられていた。人々は、複数人で飲む場では酒に「コミュニケーションを潤滑にする」役割を求め、1人で飲むときには「味を楽しむもの」「気分転換できるもの」という役割を求めていることもわかった。そして、酒は人々に深い話をじっくりとさせるきっかけとなっており、行き過ぎなければ人々の距離を縮めることに寄与するものだという示された。

4.3 酒が現代日本社会にもたらすもの

酒は、現代日本社会がコンヴィヴィアルな社会となるための第一歩、「人々が自己の内面を他者に伝え合うことができるように手助けをする」ことに貢献している。

5. 結論

本論文は、先行研究においてあまり注目されていなかった「日常生活での飲酒」に焦点を当てたことで、「飲みニュケーション」が今も尚日本社会にとって重要であることを示した点で、新たな知見を付与している。また、本論文では酒を主体として扱うことで、酒はただ飲まれるだけの消費財ということではなく、人々の行動に影響を与える存在であることも示した。酒は人々が自己の内面を他者に伝え合うことができるように手助けをしている。人々はこの効用を求めて酒を飲んでいるのである。人々が酒の効用を借り、自己の内面を他者に伝える抵抗が薄まっていくことによって、現代日本社会はコンヴィヴィアルな社会となっていくことができるのではないだろうか。

謝辞・引用文献・付録（アンケート調査票）（アンケート結果）